

子どもは生まれ育った地域をどのように捉えているのか
— 鳥取県東部における小・中・高校生に対する意識調査 —

田中 大介

How do children recognize the place where they were born and raised?
: A cross-sectional study of elementary, Junior and Senior. High schools in east Tottori.

TANAKA Daisuke

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第15巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.2

平成31年 3月 20日 発行 March 20, 2019

子どもは生まれ育った地域をどのように捉えているのか

- 鳥取県東部における小・中・高校生に対する意識調査 -

田中大介*

How do children recognize the place where they were born and raised?
A cross-sectional study of elementary, junior and senior high schools in east Tottori.

TANAKA Daisuke*

キーワード：地元への愛着，横断研究，発達的变化，地域間格差

Key Words: Attachment to birthplaces, Cross-sectional study, Developmental change, Regional disparities

1. はじめに

近現代の工業化された社会においては生産力向上のために労働力を集約することが重要な意味を持つ。労働力集約のため，人は労働力として地方から大都市へと流れるようになる。このプロセスは，一定数の労働力が移動するといった単純なものでなく，労働力の流入によって，さらに新たな就労の機会が創出されるといったダイナミックなものであり，また労働力を供給する教育機関などのニーズも増えることになる。このようにダイナミックに発展していく大都市圏の持つ進学・就労のキャパシティの大きさやその多様性は，大都市圏外の地方に住む若者にとって強力なインセンティブとなる。「労働力の集約」という近代化の命題は，結果として地方から都市へという若年層の人口流入に際限なく拍車をかけ続けることになる。

地方の若者を惹きつけるものは進学・就労の機会ばかりではない。大都市圏のスケールメリットによって実現される大型娯楽施設や映画・コンサート，美術展などといった都市生活における消費文化がマスメディアを通じて魅力的に喧伝されることで，地方の若者は大都市圏での生活に対して憧れを抱くこともあるかもしれない。

また，学校文化にも埋め込まれた「よりよい教育の機会を目指す」競争原理も，立身出世的道德観とあいまって，地方の子どもたちの大都市圏への憧れを醸成する要因になりえるだろう。吉川（2001）は

学歴社会と地域間格差の問題を重ねたローカル・トラック論を論じている。進学・就職といった，ほとんどすべての発達主体に共通した，人生経路における制度的必須通過点（サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー，2006）において，地方で生まれ育った子どもたちは，大都市圏における子どもに比べ，より負荷の高い発達課題が課せられている，といえるだろう。すなわち，心理的発達の一環としての養育者からの心理的離乳（Hollingworth, 1928）に加え，生まれ育った場所である「地元」からの物理的な（さらには心理的な）別離を余儀なくされる可能性が高いということである。

発達課題としての心理的離乳，あるいは自律・自立を考えたとき，念頭に置かれる鍵概念としての「愛着」（Bowlby, 1969）は，主に特定の人物との結びつきを前提に検討される。発達を取り巻く環境の中で人間関係を「図」としてとらえるならば，「地元」は文字通り「地」として，発達主体の背景・舞台の役割程度にしかとらえることができない。しかし一方で自分自身と養育者や親しい友人など，発達とともに変遷する「重要他者」とを結びつける媒介として地域，あるいは「地元」をとらえるのであれば，発達主体のアイデンティティの一部ともなりうるものであり，心理的結びつきという観点から「愛着」の対象としてすら定義することが出来よう。言い換えれば「地元」は育ちの背景要因ではなく，「重要他者」を包括する概念だといえるだろう。

*鳥取大学地域学部地域学科

これに関連して石黒(2012)は人間関係が地域間移動の障壁となることを示している。地域間移動が比較的盛んであると思われる欧米でも、近年では心理的ストレスラーとしての地域間移動に着目した心理学的研究が盛んになりつつある(例えばレビューとして Stroebe, Schut & Nauta, 2015)。こうした研究で主に取り上げられているのは“Homesickness”, すなわち移動後に生じたストレスに着目したものである。移動がストレスであるのなら、一方でこうしたストレスを予期し、回避しようとする働きが生じることも容易に想像できる。地域間移動が、例えば内戦や迫害からの逃避といった社会的要因に基づくものであれば、生存のために地域間移動に起因するストレスを甘受することも選択肢に入るだろう。しかし、自らの挑戦や漠然とした“憧れ”などといった個人的要因に基づく移動であれば、個人における意思決定プロセスの中で人間関係の断絶・再構築のリスクが移動を妨げる阻害要因として働くことは当然のことだろう。

さらに高度経済成長から転じた現在の日本社会の停滞的風潮は、若者の比較的楽観的な将来展望を軌道修正させているといえる。阿部(2013)は東京などの大都会に憧れず地方都市に魅力を見出す若者に焦点をあてることで、「大都会に憧れる若者」は生涯発達の過程の中で生じる普遍的な存在ではなく、高度経済成長を続ける社会の中で生まれた、時代特異的な概念であることを明らかにした。先述した大都市のスケールメリットは若者を引きつける誘因であり続けたとしても、その力は弱まりつつあるのかもしれない。古典的な認知モデルでも、接近したい誘因が弱まり、加えてこれまで築いてきた人間関係を失うリスクがあるのであれば、いわゆる「地元志向」は一種のストレス回避行動として合理的に説明ができる。

地元志向は「停滞」なのか？

これまで、進路決定を間近に控えた若者を中心にすえて論を進めてきたが、それでは発達過程においては、より前段階にいる子どもたちではどうなのだろうか？学校における学びにおいて、あるいは取り組んでいるスポーツや文化・芸術活動などの技術習得において、「より高いところを目指す」価値観は様々な文脈に埋め込まれているといえる。「勉強してノーベル賞を取る」、「全国大会を目指したい」、「オリンピックに出場したい」、「スペインでサッカー選手として活躍したい」という子どもたちの「夢」は現実性に乏しく、また具体性にも欠けている、とし

てしまうのは簡単だが、一方で、地域間移動の抵抗感などとはまったく無縁であるところに注意が必要である。こうしたある種、無知ゆえの“勇敢”で“威勢の良い”願望は、例えば小学生から中学生、高校生に至る過程でどのように発達・変化していくのだろうか。

児童期から青年期に至る暦年齢を軸とした発達において、肉体的成長と精神的・認知的発達の速度を比較してみれば、そこには時間的ずれがあるといえる。一般的に、スポーツ競技に関する相対的な能力を自身で悟り、その道を追求していくことが可能なのか判断できるようになるのは、大学入学から始まる高等教育の可能性について判断できるようになる時期に比べて早い段階である。例えば「大学へ進学するか否か」という進路選択の前に、「プロ野球選手を目指すか否か」という進路選択をする場合が多い、といえる。そういった点も念頭に入れつつ、子どもたちがどのような将来を予想しているのか、どのような将来を希望しているのかを、子どもたちの視点から明らかにすることは、どこでどういった人生を歩んでいくのかを考える上では必要なことになるだろう。

子どもの地域志向性について検討する上で、重要なのは生まれ育った地域に対して「ここにいるだろう」、あるいは「ここにいたい」という展望や願望に対する中立的な立場である。従来の(特に現代社会に暗黙裏に存在する)発達観では、そうした発想は「内向き」、あるいは停滞的であると評価されてきた。例えば、いわゆる与えられた環境を甘受する姿勢として、「フォークロージャー」(Marcia, 1966)という類型に分類される場合が多い。こうした評価につながる価値基準の根底にあるのは、高度経済成長期における成長的・競争的価値観であるということはこれまで説明してきた通りである。しかし、あまたある価値基準のなかのひとつに盲従し、ひとつのコミュニティの中で全生涯を過ごす文化の価値(例えば寝屋子など。村本・遠藤, 2014)を否定的に捉えるのは自文化中心主義的であるとの非難を免れないだろう。なりたいた職業になるために地域を出て行く人もいれば、一方で地域にとどまるためにそこで職業を探すというアイデンティティの求め方もあり得るはずである。そしてこれらは適応的観点からすると、どちらがよりすぐれている云々と言うべきものではない。そして、こうした子どもたちのいまのありようを客観的に捉えることは、地方で育つ子どもたち・若者の一方で歯止めがかけられなくなった人口流出を食い止め、地域間における過度な格差の広が

りを食い止める手だてを提言するものになるかもしれない。

こうした前提を踏まえて、故郷からの離乳を求められる可能性が比較的高い地域の一例としての鳥取の子どもたちは、「自らの生まれ育ったまち」をどのようにとらえているのかを横断的に調査した。なお、本研究は「育ったまち」に対するアンケートとして実施された。もともとは「地元志向」とよばれる傾向性を検討する目的の調査であったが、「地元」という表現の持つ多義性を考慮し、この言葉を用いなかった。一方で「育ったまち」という概念も回答者ごとに異なると考えられた。そうした限界も念頭に調査し、解釈した。解釈においては「地元」という表現を用いたほうが説明しやすい箇所もあるので、そうした言葉遣いを行っている箇所もあることを先に断っておく。

II. 方法

1. アンケート調査の作成

アンケートは、「将来、今住んでいる地域に住んでいると思うか」という地元との関係性に関する時間的展望と、「住み続けたいと思うか」という地元との関係維持の願望の強さを目的変数とし、それらの説明要因となりうる候補を列挙する形で構成された。

また、原則的には調査対象となる小学生・中学生・高校生に対し、同一の質問を行ったが、各年代での内容理解における違いを念頭に、小学生に対しては平易な表現になるように表現を改めた。実際に用いた質問項目は付録に示した。

まず、性別、年齢の後に、回答者と対象となる土地（「地元」）との関係の時間的長さに関連した質問を行った。具体的には、引っ越しをしたことがあるかを尋ね、経験がある場合は以前の居住地はどこだったのか、次いで現在の居住地を尋ねた。加えて、現在住んでいるところにどのくらい住んでいるのか、住んでいる家はどの世代からあるのかを尋ねた。

次に、対象となる地域に対する愛着に関して尋ねた。具体的には、今住んでいるまちが好きかどうかとその理由、そして家の近所の好きな場所に関して尋ねた。さらにどこで買い物をするのが好きか、尋ねた。この質問は地方都市におけるイオンの存在の大きさを示した社会学的論考（阿部、2013）と関連付けたものだった。

次いで、対象となる地域との情緒的結びつきに関連する項目を用意した。具体的には地域の祭りへの参加の有無を「必ず参加している」から「全く参加

していない」までの4件法で、近所住民との係わり合いの程度を「近所の人と立ち止まって話しをすることがあるか」という質問で「よくある」から「全くない」までの4件法で、先祖の墓の有無を「ある」、「ない」、「わからない」の三択で尋ねた。それぞれ地域の祭礼や地縁的つながりのある人々との関係、および家庭における冠婚葬祭の一例が地域と結びついているか、を問うものであった。なお、墓に関する質問は研究協力を依頼する過程で、宗教的事柄を問うことに難色を示した学校もあったため、一部の学校へのアンケートからは削除した。

あわせて家族との関係性をコミュニケーションの頻度によって尋ねた。具体的には「家族とよく話すか」について、「よく話す」から「全く話さない」まで4件法で尋ねた。青少年の発達において重要他者が親から友人などへと移行していくプロセスは家族内におけるコミュニケーションが低下するという形をとる場合もある。こうした家族との結びつきの変化が、住んでいる地域との関係性にも影響を及ぼす可能性があると考え、この質問を入れた。

同様の理由から生活時間の多くを占める学校生活に関する質問と、友人関係の充実について尋ねた。家族関係と同様に、地域との結びつきを求める志向性について「愛着」概念を念頭におくのであれば、子どもを取り巻く人間関係の充実が、いわゆる地元志向を強める要因になると考えられる。こうした仮説的観点からこれらの質問を用意した。

その後、将来的展望としてどういった職業に就きたいと考えているのかを尋ねた。具体的な職業名を自由記述によって回答してもらった。

最後に、鳥取に住み続けたいと思うか、住み続けられると思うか、それぞれ「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの4件法で回答してもらった。ここでは「まち」あるいは「地元」をイメージしやすくするために、「鳥取」を明示した。

2. 調査時期・対象校・対象者

本調査は2014年12月から翌年1月にかけて行われた。

学校の選定に当たっては小学校・中学校では校区の環境を考慮して選定し、高等学校では普通科と専門科のバランスを考慮して選定した。その上で、鳥取県東部の小学校5校、中学校5校、高等学校4校に依頼し、うち小学校5校、中学校3校、高等学校3校から協力の許可を得た。

結果として、小学校の対象校は中心市街地の学校2校、郊外住宅地の学校1校、農村部の学校2校と

なった。中学校では中心市街地の学校1校、農村部の学校1校、そして入試選抜のある進学校1校となった。高等学校では県立の全日制普通科高校と県立の専門科高校、そして私立の進学校がそれぞれ1校ずつとなった。

小学校5年生、中学校、高等学校のそれぞれ1年生を対象者とした。回収したアンケートは小学生189名分、中学生219名分、高等学校345名分であった。

3. 実施方法

先述のように選定された学校に対して地元志向に関するアンケート協力の依頼文を送り、承諾があった学校に対して作成したアンケートを送付した。そして内容について検討を行った。先述したように「お墓」についての項目に関して拒否された場合は削除したものを改めて送付した。

アンケートの実施にあたっては、対象学年のクラス担任にアンケートを渡して適当な時間帯に実施し、回収してもらった。

II. 結果・考察

1. 年代別にみた単純集計結果から

まず、協力者の属性などに関して示した(表1)。本研究は横断調査であり、前提として中学1年生は小学5年生の2年後の姿、高校1年生は中学1年生の3年後の姿であることを仮定している。ここではその前提がどの程度担保されているかを確認した。性別に関しては小学生で男子がやや多く、高校生では女子がやや多いという偏りが見られた($\chi^2_{(2)}=11.83, p<.05$)。

「引越しをしたことがありますか」という質問においては、小学生において「はい」と答える割合が多い一方で、高校生においては「いいえ」が多かった($\chi^2_{(2)}=19.70, p<.05$)。「引越し」というライフイベントを、誰しもに同じ確率で生じうる事象、ととらえるのであれば、年齢が高くなるほど引越し経験が増加することが予測されるが、今回の結果からは逆になっている。こうしたことから、小学生・中学生・高校生の各群が、厳密な意味においては発達の連続性を持った同質の集団であると考え難い。本研究の結果はこうした限界を含んだものであるということを念頭に解析・解釈を行った。

表1 協力者の性別・年齢・引越し経験

		性別について			
		男	女	欠損値	合計
小	N	101	87	1	189
	(%)	(53.7)	(46.3)		
中	N	107	108	4	219
	(%)	(49.8)	(50.2)		
高	N	135	208	2	345
	(%)	(39.4)	(60.6)		

		年齢について	
		平均	SD
小		10.73	0.444
中		12.80	0.423
高		15.80	0.407

		引越し経験の有無			
		はい	いいえ	欠損値	
小	N	113	71	5	189
	(%)	(61.4)	(38.6)		
中	N	105	108	6	219
	(%)	(49.3)	(50.7)		
高	N	139	199	7	345
	(%)	(41.1)	(58.9)		

転居について・いつからそこに住んでいるか

転居の経験者に以前の住所を尋ねたところ、小学生では、引越し経験がある、と答えた113名のうち、鳥取県内での転居は76名、海外も含む県外からの転居は28名、わからない、あるいは無回答だった者は9名だった。中学生では、105名のうち鳥取県内での転居は63名、海外も含む県外からの転居は23名、わからない、あるいは無回答だった者は19名だった。高校生では、139名のうち鳥取県内での転居は86名、海外も含む県外からの転居は31名、わからない、あるいは無回答だった者は22名だった。引越し経験者に関しては県外からの転入者の割合と学年との間の有意な関連は確認されなかった($\chi^2_{(2)}<1$)。

現在の居住地に住んでいる期間を訪ねた(表2)。平均居住期間は学年が上がるほど長くなっていた($F_{(2,662)}=60.02, p<.05$)。

表 2 協力者の居住期間

	居住期間(月)		
	有効回答(N)	平均	SD
小	159	85.8	41.95
中	186	125.2	91.64
高	320	155.0	55.73

表 3 家・何世代前から住んでいるか

あなたの住んでいる家はいつからそこにありますか？(小学生)

あなたはどの世代から今の場所に住んでいますか(中学生)

		親から	祖父母 から	祖父母 より前か ら	わから ない	欠損値
小	N	62	20	3	100	4
	(%)	(33.5)	(10.8)	(1.6)	(54.1)	
中	N	89	20	15	79	16
	(%)	(43.8)	(9.9)	(7.4)	(38.9)	
高	N	166	39	54	75	11
	(%)	(49.7)	(11.7)	(16.2)	(22.5)	

次に対象者および家族が現在の住所に居住している期間を尋ねた(表3)。回答傾向には年代間に有意な偏りがあった($\chi^2_{(6)} < 69.56, p < .05$)。これは小学生において「わからない」と回答した割合に依存した結果ともいえる。質問の文言として、小学5年生に対しては「あなたの住んでいる家はいつからそこにありますか？」と尋ねたのに対し、中学1年生および高校1年生には「あなたはどの世代から今の場所に住んでいますか」と尋ねた。質問意図をより明確にする目的で小学生に対しては表現を変更したのだが、結果として字義通りに解釈すれば、家の建造物そのものの歴史を問うかのように受け取られた可能性があった。例えば、住所は変わらず建物を建て替えた場合、あるいは中古住宅へ引っ越してきた場合、小学生への質問と中・高校生への質問とでは質問の同一性が担保されず、「わからない」が多くなった可能性がある。中学・高校生に対して小学生の「わからない」比率が高い理由はそこに起因する可能性があるかもしれない。

一方、同一の質問だった中学生と高校生においても、発達とともに「わからない」が減少する傾向が伺えた。こうしたことから発達を通じて住んでいる

場所への興味・理解が深まり、「わからない」から「祖父母より前から」に移行した、と解釈できる可能性がある。しかし、こちらに関しても質問の文言が正しく理解できたかどうかという問題も残された。

地元への愛着に関連すると思われる要因

現在住んでいる「まち」についての好感度を尋ねた(表4)。その結果、年代間で回答に偏りが認められた($\chi^2_{(6)} < 86.93, p < .05$)。「とても好き」という評価が発達の変化とともに減少している事が認められた。一方、各年代で80%前後、「とても好き」「好き」という肯定的な評価をしていることが明らかとなった。

表 4 現在住んでいるまちの好感度

今住んでいるまちは好きですか？(小学生)

あなたが今住んでいるまちは好きですか？(中学生)

		とても 好き	好き	あまり 好き では ない	全く好 き ではな い	欠損 値
小	N	92(49)	81(42)	11(8)	2(1)	3
	(%)	(49.5)	(43.5)	(5.9)	(1.1)	
中	N	63(30,2)	97(42)	33(19)	17(14,1)	9
	(%)	(30.0)	(46.2)	(15.7)	(8.1)	
高	N	55(24)	220(79)	55(25)	8(5)	7
	(%)	(16.3)	(65.1)	(16.3)	(2.4)	

*Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

「まち」の好感度を聞いた質問に「とても好き」ないし「好き」と肯定的に回答した者に対し、その理由を聞いた。選択肢としては「家族がいる」、「友だちがいる」、「まち自体が好き」、「その他」であり、自らにとって「まち」が好きな根拠を複数選択可能な形で選んでもらった(表5)。割合(%)は「まち」に対して肯定的回答をした者のうち、当該選択肢を選んだ者の割合である。「まち」に肯定的な感情を持つものは家族や友人、また「まち」そのものに対して全般的に肯定的な印象を持つことが明らかになった。その中で、友だちについては小・中・高と回答者数が減少する一方、家族やまち自体を選択する割合はそれほど減少しないことがわかった。

表5 「まち」が好きな要因(複数回答)

	家族	友だち	まち 自体	その他
小	N 94(50) (%) (54.7)	123(66) (71.5)	60(31) (34.9)	23(7) (13.4)
中	N 75(26.1) (%) (47.8)	106(47.1) (67.5)	55(23.1) (35)	28(13.1) (17.8)
高	N 128(31) (%) (48.3)	142(55) (53.6)	94(42) (35.5)	37(13) (14)

* Nのカッコ内は男子数. カンマのある場合, その後ろの数値は性別不明者数.

小学生の質問紙には「その他」に空欄があり, 23名が好きな理由を自由回答した. それらの回答をおおよそ分類してまとめた(表6). 自然や環境に関する理由(「自然・環境要因」)や住んでいる住人に根拠を求めた理由(「対人関係要因」), そこでの生活の心地よさにつながる機能的根拠(「機能的要因」), そして生まれ育ったこと, あるいはそうしたところとの類似性などを根拠とした理由(「運命・親近性要因」), の4つに大別することができた.

表6 小学生の「まち」が好きな理由
(「その他」の自由回答)

自然・環境要因	
「空気がきれいだと思う。」	「きれい」
「静かだから」	「静かでおだやかだから」
「自ぜんがあるから(歴史も)」	「人口が少ないから。」
「自然がいっぱいだから。」	
「自然がたくさんあるから, 静かだから, 災害が少ないから。」	
「広々と使えるから。(特に庭)」	
対人関係要因	
「やさしい人がいるから」	「近所の方がやさしいから」
「地いきの人がやさしいから」	「人が優しい」
機能的要因	
「明るくて良い」	「学校も楽しいから。」
「じゅくがある！」	
運命・親近性要因	
「自分が生まれた町だから」	
「前, 住んでいた所と似ているから」	

表7-1 家の近くの好きな場所(小学生)

家の近くに好きな場所はありますか(小学生)				
		ある	ない	欠損値
小	N	94(44)	87(54)	8
	(%)	(49.7)	(46)	(4.2)

* Nのカッコ内は男子数.

表7-2 家の近くの好きな場所(中学生)

あなたは家の近くで好きな場所はありますか,
あれば, 理由も教えてください(中学生)

		具体的な場所 を回答	「ない」などと 回答	無回答
中	N	62(33)	67(36.1)	90
	(%)	(28.3)	(30.6)	(41.1)
高	N	96(44)	47(18)	202
	(%)	(27.8)	(13.6)	(58.6)

* Nのカッコ内は男子数. カンマのある場合, その後ろの数値は性別不明者数.

次いで, 家の近くに好きな場所があるかどうかを尋ねた(表7-1, 7-2). この質問項目に関しては, 小学生と中学生では内容が異なっていた. 具体的には, 小学生では好きな場所の有無を回答してもらった上で, 具体的な場所とその理由を回答してもらった. 一方で中学生に対しては, 「好きな場所がありますか. あれば理由も教えてください」と尋ねたため, もし好きな場所があったとしても記入することに抵抗があった場合は無回答となった可能性があった. そのため好きな場所の有無の比率を小学生と中学生で比較することは出来なかった.

小学生では好きな場所がある, と約半数にあたる94名が回答した. そのうち具体的で了解可能な回答のあった89名の回答から106の場所を抽出した.

中学生においては62名が「ある」とした上で自由解答欄に具体的な場所を記入していた. そのうち「近くに図書館や病院があって便利だから」と回答した1名の回答を除き, 61名分の回答から73の場所を抽出した. 高校生に関しても96名の「ある」と答えた回答者の回答から, 98の場所を抽出した.

小・中・高のそれぞれの年代によって回答された「好きな場所」を分類してまとめた(表8).

表 8 家の近くの好きな場所

		小	中	高
公園	N	47	20	23
	(%)	(44.3)	(27.4)	(23.5)
学校・公民館・ 公共スペース	N	17	6	10
	(%)	(16.0)	(8.2)	(10.2)
道路・駐車場・神社・田んぼ・ 秘密基地・駅など遊び場所・た まり場所	N	10	4	8
	(%)	(9.4)	(5.5)	(8.2)
家	N	14	9	5
	(%)	(13.2)	(12.3)	(5.1)
図書館・書店・自習スペース・ 習い事の教室	N	4	5	10
	(%)	(3.8)	(6.8)	(10.2)
自然	N	9	13	30
	(%)	(8.5)	(17.8)	(30.6)
温泉	N	1	0	1
	(%)	(0.9)	(0.0)	(1.0)
ショッピングセンター・コンビニ	N	4	14	10
	(%)	(3.8)	(19.2)	(10.2)
全体	N	0	2	1
	(%)	(0.0)	(2.7)	(1.0)
合計	N	106	73	98

「公園」には、近所の公園の具体名を挙げるなどした回答、場所を「公園」と回答した上で「友だちと遊ぶから」、あるいは「思い出があるから」など日常的に利用する旨をその理由と挙げた回答を分類した。小・中・高のそれぞれの年代で「お気に入りの場所」として選択されるが、年代別にみると小学生全体の40%以上がお気に入りの場所として挙げる一方、中・高ではその割合は半分近くに減少していた。

「学校・公民館・公共スペース」には「学校」や「校庭」、「博物館」や「広場」、「地区の体育館」や「スポーツパーク」など遊びやスポーツの場としての公共施設を挙げた回答を分類した。「学校」の回答は小学生が突出して多く、高校生では「中学校のグ

ラウンド」を挙げた1回答のみだったがカテゴリー全体としては、全体で10%前後の回答となった。

「道路・駐車場・神社・田んぼ・秘密基地・駅など遊び場所・たまり場所」には、遊び場として用意されているわけではないが、遊びを展開できるような場所の回答を分類した。「神社」を回答したのは小学生3、中学生1、高校生2で、少数ながらも各年代で挙げられていた。「秘密基地」は小学生で2回答、中学生では「はいきょ」として1回答挙げられていたが高校生では0だった。カテゴリー内ではその内訳は変化するものの、約10%弱がこうした場所を「お気に入りの場所」として認識していることがわかった。

「家」は自宅や友人宅、祖父母宅に関する回答を分類した。小・中では10%強の回答があったが高校生では少なくなる傾向が見られた。

「図書館・書店・自習スペース・習い事の教室」には、本やマンガへの興味、自習や自己研鑽に関する回答を分類した。小学生では「図書館」という回答だけだったのに対し、中学校では「書店」や「スイミングスクールのプール」といった回答が現れ、高校では「古本屋」という回答もあった。回答数自体は少ないが、割合としては年齢とともに増加する傾向にあった。

「自然」には「山」、「森」、「海」といった抽象的な存在としての自然環境をあげた回答を分類した。割合としては「図書館」と同様に年齢とともに増加する傾向が見られた。それぞれの回答としても小学生が「近くの川」や「近くの山」といった回答が多かったのに対し、中高生になると「川」や「山」といった抽象性が高まった回答が多くなった。また、「海」についての回答が高校生から出現（11回答）し、このカテゴリーは高校生全体の3割を占めるほどとなっていた。加えて、「キレイダカラ」、「気持ちいいから」、「なんかおちつく」といった、内面的な理由付けがなされていた。

わずかであるが「温泉」に関する回答もあり、小学生では「近所の人と話せるから」、高校生では「足湯」を挙げて「夜に1人で行くとおちつくから」という回答があった。

「ショッピングセンター・コンビニ」には買い物に行くスーパーやコンビニ、ショッピングセンターやファーストフード店、ゲームセンターなどに関する回答が分類された。世代別に見ると回答全体に占める割合としては中学生で高くなり、高校生で減少する傾向がみとれた。

最後に、頻度としてはわずかであったが、住んでいる地域全体を「好きな場所」と回答したものを「全

体」に分類した。

どこで買い物をするのが一番好きかたずねた結果をまとめた(表9)。選択肢は小学生版と中高生版では若干異なっており、小学生版では「商店街」、「近くのスーパー」、「ショッピングセンター(イオンなど)」、「コンビニ」、「その他」であり、「その他」には自由記述欄があった。一方で中高生版では3つ目の選択肢が「郊外型商業施設(イオンなど)」と表現が若干異なり、「その他」には自由記述欄がなかった。両版ともその後、選択に対する理由を問う自由解答欄がそのあとに続いた。複数選択肢を選択するなどした回答を除いてまとめた。

表9 どこで買い物をするのが一番好きですか

		小	中	高
		N=177	N=180	N=297
商店街	N (%)	7(4) (4.0)	5(2) (2.8)	7(2) (2.4)
スーパー	N (%)	18(12) (10.2)	19(10) (10.6)	50(23) (16.8)
ショッピングセンター	N (%)	131(68) (74.0)	104(41) (57.8)	159(45) (53.5)
コンビニ	N (%)	14(9,1) (7.9)	36(24,1) (20.0)	52(35) (17.5)
その他	N (%)	7(3) (4.0)	16(10,1) (8.9)	29(11,1) (9.8)

* Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

年齢が高くなるにつれてショッピングセンターへの志向性が高まることが予想されたが、むしろ減少する傾向が示された。また、高校生では男女の偏りが顕著であり、女子がショッピングセンターを好む傾向が見られた。どこを好むのかの全体的な割合は発達に関連して変化する傾向がみられた。具体的には、コンビニの割合が中学生から高くなることは、小学生に比べて中高生の経済的自立が高まり、手軽に買い物に行くことができる傾向を示しているといえる。これは「その他」の選択率上昇にも関連しているといえよう。

その他の自由回答に関しては「書店」や「リサイクルショップ」など、高校生では「インターネット」という回答が2件あった。

地域の祭りへの参加頻度について集計した(表10)。小学生が「よく参加」が最大だったのに対し、中高生ではそれが「時々参加」へと移行し、年齢が上がるに連れて地域の祭りや行事への参加が少なくなる傾向が示された($\chi^2_{(6)}=128.32, p<.05$)。

具体的な祭りに関しては、質問文で例示した、鳥取市で行われる最大の祭りである「しゃんしゃん祭り」や地域の「納涼祭」のほか、地域の公民館の祭りなどが挙げられていた。

表10 「祭り」への参加頻度

		よく参加	時々参加	あまりしない	全くしない	欠損値
小	N (%)	101(47,1) (53.7)	52(25) (27.7)	30(24) (16.0)	5(4) (2.7)	1
中	N (%)	42(15,2) (20.0)	107(45) (51.0)	37(24) (17.6)	24(17,1) (11.4)	9
高	N (%)	37(14) (10.9)	181(63) (53.6)	80(30) (23.7)	40(26) (11.8)	7

* Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

表11 地域住民との交流頻度

		よくある	時々ある	あまりない	全くない	欠損値
小	N (%)	20(6) (10.6)	54(27) (28.6)	66(31,1) (34.9)	49(37) (25.9)	0
中	N (%)	19(10,2) (8.9)	55(24) (25.7)	84(36) (39.3)	56(34,1) (26.2)	5
高	N (%)	10(1) (2.9)	94(29) (27.7)	145(62) (42.8)	90(42) (26.5)	6

* Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

地域住民との交流を検討する目的で、近所の人と立ち止まって話す頻度を尋ねた(表11)。各年代とも「あまりない」の割合が最大であるが、「よくある」の割合が年齢の高まりとともに低下する傾向が見出された($\chi^2_{(6)}=15.314, p<.05$)。

さらに自らの出自やルーツをどの程度理解しているのかを尋ねるために自分の家の「墓」が近くにあるかどうかを聞いた(表 12)。先述の通り、この項目に関しては協力校によっては除外が求められたケースがあり、中高生の回答数は少なくなった。こうした制約のある項目だったが、年代ごとの回答の偏りはなかった($\chi^2_{(4)}=5.9513$, n.s.)。

表 12 近所に先祖の墓があるか

		ある／ はい	ない／ いいえ	わから ない	欠損 値
小	N	68(31)	89(52,1)	30(17)	2
	N=189 (%)	(36.4)	(47.6)	(16.0)	
中	N	32(16,2)	37(17)	6(3)	1
	N=76 (%)	(42.7)	(49.3)	(8.0)	
高	N	78(24)	94(27)	17(7)	5
	N=194 (%)	(41.3)	(49.7)	(9.0)	

* N のカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

Nとして示した総数はアンケートに同項目が含まれていた協力者数。

愛着と関連して、家族関係を問うために「家族とよく話しをするか」を尋ねた。その結果、各年代とも9割前後「よく話す」、あるいは「話す」と家族関

係について肯定的な回答が大半を占めるという結果が得られた。割合としては年代が高くなるにつれて「よく話す」から「話す」へ移行する傾向があった($p = .00000287$, フィッシャーの直接確率)。

表 13 家族との会話の頻度

		よく 話す	話す	あまり 話さない	まったく 話さない	欠 損 値
小	N	134(63,1)	46(31)	8(6)	1(1)	0
	(%)	(70.9)	(24.3)	(4.2)	(0.5)	
中	N	110(45,2)	78(47)	23(9)	5(4,1)	3
	(%)	(50.9)	(36.1)	(10.6)	(2.3)	
高	N	169	149	19	2	6
	(%)	(49.9)	(44.0)	(5.6)	(0.6)	

* N のカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

学校生活におけるポジティブな側面を訪ねる目的で「学校ですごく中で、好きなことはなんですか? (小学生)」、「学校生活の中で好きなことは何ですか? (中高生)」と複数回答を認める形で尋ねた(表 14)。「授業」や「クラブ活動/部活動」を選択する割合が発達と共に低下する傾向が明らかとなった。

表 14 学校の魅力(複数回答可。下段の%は全回答者数における該当選択肢を選んだ割合を示す)

		好きな 先生	好きな 授業	友だち	クラブ活動 /部活動	その他	該当 なし
小	N	16(7)	89(38)	153(81,1)	100(53,1)	20(12)	4(3)
	N=189 (%)	(8.5)	(47.1)	(81.0)	(52.9)	(10.6)	(2.1)
中	N	25(12,1)	79(43,2)	163(73,2)	82(39,1)	14(9,1)	19(11)
	N=214 (%)	(11.7)	(36.9)	(76.2)	(38.3)	(6.5)	(8.9)
高	N	28(7)	56(26)	275(96)	126(54)	7(4)	24(12)
	N=336 (%)	(8.3)	(16.7)	(81.8)	(37.5)	(2.1)	(7.1)

* N のカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

学校における友人関係をどのようにとらえているのかについて「学校を卒業しても仲良くしたい(小学生)、付き合いたい(中高生)友だちはいますか」と尋ねたところ、各年代とも9割以上がそうした友だちがいると回答した(表15)。中高生では回答しなかった欠損値の割合も大きくなるが、世代間で大きく変化する傾向は見られなかった。この質問は交友関係が学校生活という期間を超えた展望を持っているかを問うことが目的だったが、回答者の多くはそうした交友関係に関する長期的な時間的展望を持っていることが明らかとなった。

表15 「卒業後も付き合いたい」友だちの存在

	いる	いない	欠損値
小 N	185(98.1)	2	2
(%)	(98.9)	(1.1)	
中 N	186(85.2)	16(12)	17
(%)	(92.1)	(7.9)	
高 N	319(122)	11(6)	15
(%)	(96.7)	(3.3)	

* Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

表16 「将来の夢」に対する回答結果

	小		中		高	
	n	%	n	%	n	%
無回答・考えていない・迷っているなど	67		90		155	
スポーツ選手	36	22.2	13	8.8	0	0.0
看護師・薬剤師・コメディカル・医学系	16	9.9	16	10.8	39	18.8
保育士	8	4.9	7	4.7	11	5.3
医師・歯科医師	8	4.9	3	2.0	10	4.8
パティシエ・パン屋さん・ケーキ屋さん・飲食	7	4.3	6	4.1	13	6.3
俳優・歌手・モデル・声優・映画・舞台	7	4.3	4	2.7	9	4.3
クリエイティブ・デザイナー・作家・漫画家	7	4.3	1	0.7	1	0.5
音楽家・画家	6	3.7	6	4.1	0	0.0
警察官・自衛隊・消防	6	3.7	3	2.0	4	1.9
美容師・ネイル	5	3.1	2	1.4	7	3.4
ファッション・スタイリスト	5	3.1	2	1.4	3	1.4
獣医・ペットショップ	4	2.5	10	6.8	3	1.4
その他	4	2.5	7	4.7	0	0.0
学校の先生	4	2.5	4	2.7	15	7.2
農業・漁業・林業	4	2.5	3	2.0	2	1.0
習い事の先生	4	2.5	1	0.7	2	1.0
科学者・学芸員・研究者	3	1.9	4	2.7	5	2.4
アニメ・まんが・イラストレーター	3	1.9	4	2.7	2	1.0
本屋・図書館	3	1.9	2	1.4	3	1.4
航空関係	3	1.9	2	1.4	0	0.0
建築家・大工・造園・土木	2	1.2	5	3.4	4	1.9
法曹・司法書士	2	1.2	5	3.4	3	1.4
会社員・事務	2	1.2	3	2.0	5	2.4
主婦・お母さん	2	1.2	0	0.0	0	0.0

公務員	1	0.6	5	3.4	9	4.3
政治家	1	0.6	3	2.0	0	0.0
旅行会社・海外	1	0.6	2	1.4	2	1.0
作家	1	0.6	2	1.4	1	0.5
精神性	1	0.6	2	1.4	0	0.0
マスコミ	1	0.6	1	0.7	4	1.9
介護士	1	0.6	1	0.7	3	1.4
ゲーム	1	0.6	1	0.7	2	1.0
ブライダル	1	0.6	0	0.0	4	1.9
通訳	1	0.6	0	0.0	3	1.4
花屋	1	0.6	0	0.0	0	0.0
スポーツ関係	0	0.0	6	4.1	4	1.9
鉄道関係	0	0.0	3	2.0	1	0.5
安定	0	0.0	2	1.4	1	0.5
エンジニア・自動車整備士	0	0.0	1	0.7	6	2.9
コンピュータ関連	0	0.0	1	0.7	2	1.0
起業	0	0.0	1	0.7	1	0.5
高収入	0	0.0	1	0.7	1	0.5
外交官	0	0.0	1	0.7	0	0.0
宇宙飛行士	0	0.0	1	0.7	0	0.0
マッサージ師	0	0.0	1	0.7	0	0.0
管理栄養士	0	0.0	0	0.0	5	2.4
サービス業・販売業・人と接する仕事	0	0.0	0	0.0	5	2.4
カウンセラー	0	0.0	0	0.0	4	1.9
社会福祉士・福祉関係	0	0.0	0	0.0	3	1.4
楽しい・面白い	0	0.0	0	0.0	3	1.4
パート	0	0.0	0	0.0	1	0.5
ニート	0	0.0	0	0.0	1	0.5
貧困を解決する、社会派	0	0.0	0	0.0	1	0.5

*表中の%は無回答以外の回答総数で該当回答の回答数を割って算出した

将来の夢

将来の夢に関して、自由記述を分類した結果を表16に示した。分類に当たっては、カテゴリーを小学生から高校生までの3つの年代で共通したものにするよう配慮した。また、業種として類似していたとしても、本質的に異なると思われるものに関してはまとめないようにした。具体的には、「水泳選手」と「水泳の先生」と「学校の先生」はそれぞれ明確に異なるカテゴリーとなるように分類した。関連して、「楽しい仕事」や「安定した仕事」といった記述は職種としての具体性を欠いているといえるが、「将来の夢」のとらえ方としてありうることでありと考えるため、具体的な職種でないものはできるだけそのままの形でカテゴライズした。また、複数の回答があった場合はそれぞれ一回答として分類した。

小、中、高の各年代で最も度数の多かったカテゴ

リーは、「無回答」、すなわち空欄だったり、「まだ決まっていない」などとして言及を避けたりしたものだった。小学生では全体回答数（229件）のうちの29.2%（67件）、中学生では全体（238件）の37.8%（90件）、高校生では全体（363件）の42.7%（155件）だった。そのため、カテゴリー間の比較を行う際には、「無回答」カテゴリーを除いた回答総数で、各々の回答数を割ることで割合を算出した。

各カテゴリーのうち、「スポーツ選手」は小学生では一番多く回答されていた。しかしその割合は中学生で半分以下となり、高校生ではいなくなった。対照的に、「看護師・薬剤師」カテゴリーは小学生で二番目であり、高校生では小学生の2倍程度にまでその割合が増えていた。職業イメージとしてはそれに類似している「医師・歯科医師」は中学生では減少するものの、小学生と高校生を見るとその割合に変

化はない。「学校の先生」は小学生でも一定数回答されるが高校生になると二番目に高い割合で回答されるようになっていた。「公務員」や「エンジニア・自動車整備士」、「マスコミ」や「ブライダル」は職務内容が小学生にとってわかりにくいという点もあるかもしれないが、年齢が上がるにつれ、選択肢として人気が高まる傾向が示された。これらから「俳優・歌手」などを、あるいは「科学者」や「医師・歯科医師」などを志向する子どもも一定数いる中で、身近で求人のあるような仕事を「将来の夢」として挙げる小学・中学・高校生が比較的多いことが明らかとなった。自己実現のために苛烈な競争をも恐れずに、華々しい夢へ向かってひたすら努力する、という青年の結晶化されたイメージは、必ずしも多くの子どもに共有されているわけではなく、「ここで生きていくために何をすればよいのか」といった形でアイデンティティを形成していく思春期から青年期に向けての発達過程を、こうした回答傾向から見いだすことができるのかもしれない。個人志向性を強め、自らに適合した社会を求めていく者がいる一方で、社会志向性を強め、今、自らを取り巻くコミュニティの中での居場所を探す、いわばコミュニティに「融け込む」形で、アイデンティティを模索する者もいる、そうした個人を超えたバランスの中で社会やコミュニティは成立しているのかもしれない。

一方で、最も多かった「無回答」だった子どもたちは、「将来の夢」を表明することに対する抵抗感があっただけで、個人的には何らかのビジョンを持っていたのかも知れず、そのため、この結果は鳥取の子どもたちの「将来の夢」を論ずるのに十分なものであったのかは、慎重になる必要があるだろう。

住み続けたいか、住み続けられるか

最後に、地域に対する愛着を問うために、鳥取に住み続けたいと思うかどうか、将来住み続けられると思うか、を「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの4件法で尋ねた(それぞれ表17, 18)。

鳥取に住み続けたいと思うか(表17)について、小学生と中学生では「そう思う」が最頻値だったが、高校生では「そう思わない」が一番高くなっており、年代ごとに割合が有意に異なることが示された($\chi^2_{(6)}=57.129, p < .05$)。

表17 鳥取に住み続けたいと思いますか

		とても そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	欠 損 値
小	N	63(35)	78(40.1)	35(20)	8(3)	5
	(%)	(34.2)	(42.4)	(19.0)	(4.3)	
中	N	37(20)	74(38.1)	68(30)	29(15.2)	11
	(%)	(17.8)	(35.6)	(32.7)	(13.9)	
高	N	43(17)	115(40)	138(55)	33(16)	16
	(%)	(13.1)	(35.0)	(41.9)	(10.0)	

*Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

最後の項目は小学生版では「大人になっても鳥取に住んでいると思いますか?」となっていた一方、中高生版は「あなたは将来鳥取に住み続けられると思いますか?」となっており、ワーディングが若干異なっていたが、前項目で希望的展望を尋ねたのに対して、客観的な事実の予測を求めるという点では基本的なニュアンスは変わらないと判断した。この項目に関して、「そう思う」が三年代とも最頻値だったが、「とてもそう思う」の割合が成長と共に減少し、一方で「そう思わない」が増加する傾向が示された(表18, $\chi^2_{(6)}=25.830, p < .05$)。

表18 鳥取に住み続けられると思いますか

		とても そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	欠 損 値
小	N	33(16)	84(43)	49(19.1)	17(9)	6
	(%)	(18.0)	(45.9)	(26.8)	(9.3)	
中	N	23(14)	83(39.1)	69(33)	31(16.2)	13
	(%)	(11.2)	(40.3)	(33.5)	(15.0)	
高	N	21(8)	140(53)	134(49.1)	34(19)	16
	%	(6.4)	(42.6)	(40.7)	(10.3)	

*Nのカッコ内は男子数。カンマのある場合、その後ろの数値は性別不明者数。

2. 重回帰分析を用いた検討

次に「鳥取に住み続けたいか」と「鳥取に住み続けられると思うか」をそれぞれ被説明変数とした重回帰分析を行った。2つの変数は実際のアンケート用紙に対応付ける形で、それぞれ得点が高くなるほど、住み続けたくなくなる、あるいは住み続けられるとは思わなくなる、と否定的な回答になるように得点化を行った。

説明変数としては「年代」と「性別」に加え、「まちへの好感度（以下、「まち」とする）」、「祭りの参加頻度（以下、「祭り）」、「地域住民との交流頻度（以下、「住民）」、「家族との会話の頻度（以下、家族）」の6変数を選択した。「年代」は小学生から高校生までをそれぞれ1~3に得点化した。「性別」は男子が1、女子が2となるよう、ダミー変数化した。「まち」、「祭り」、「住民」、「家族」についても被説明変数と同様、もっとも肯定的な回答を1として1~4までの得点化を行った。なお、「友だち」に関しては、回答が著しく偏っていたため（表15）、分析には用いなかった。

分析には欠損値のある協力者を削除したデータセットを用いた。小学生176名（女子83名、男子93名）、中学生182名（女子92名、男子90名）、高校生（女子192名、男子122名）の計672名分のデータであった。

このデータセットに対し、交互作用項を含まない回帰式にモデルを限定して複数のモデルの重回帰分析を行い、AICに基づく変数選択によるモデル選択を行った。計算はRで用い、モデル選択にはRのstep関数を用いた。最終的にVIF統計量で多重共線性の可能性を確認した。

「鳥取に住み続けたいか」を被説明変数として重回帰分析のモデル選択を行った結果、「家族」のみが外されたモデルが選択された。「年代」、「性別」、「まちへの好感度」、「祭り」、「住民との接点」の偏回帰係数はそれぞれ0.088、0.118、0.514、0.136、0.133となった。調整済み R^2 は0.306であった。それぞれ、年齢があがると、男子に比べ女子のほうが、まちへの好感度が低くなるにつれ、祭りの参加頻度が下がるにつれ、住民との接点が少なくなるにつれ、それぞれ「住み続けたい」という願望が弱くなることが示された。VIF統計量はいずれも2以下であった。

次に、「鳥取に住み続けられると思うか」を被説明変数として同様に分析した。その結果、「家族」と「年代」、「性別」が除外されたモデルが選択された。「まち」、「祭り」、「住民」の偏回帰係数はそれぞれ0.311、0.125、0.138となり、調整済み R^2 は0.163であった。

それぞれ、まちへの好感度が低くなるにつれ、祭りの参加頻度が下がるにつれ、住民との接点が少なくなるにつれ、それぞれ「住み続けられる」という予測が低くなることが示された。VIF統計量はいずれも2以下であった。

この分析から、「住み続けたい」という主観的な願望が含まれた将来展望と、「住み続けられるか」という客観的な状況に基づく可能性を踏まえた展望は、それぞれ異なる認識によって判断されることが示唆された。すなわち、「住み続けたい」という願望には、「すみ続けられるか」の予測に比べ、説明率の高さから、地域やその住民、祭りなどとの結びつきがより強く影響していることがわかった。

加えて、「住み続けたい」という願望の背景には、「年代」変数の選択結果から、発達に関連した情緒的な結びつきの要素が含まれているということが示唆された。一方で「住み続けられるか」という事柄に関しては、説明率の相対的低さから情緒的な結びつきだけでは説明できる部分が少なく、年齢との関連が比較的弱い、現実認識によって判断されることが示唆された。さらに、「地元」との結びつきに関する2つの異なった展望において、家族との関係性がどちらにも影響しなかった結果は、「地元への愛着」が「家族への愛着」とはやや異なった概念であることを裏付ける証拠だと解釈することができるだろう。

3. 最後に

本研究は、子どもが発達を通じて「地元」とどのような関係を持ち、どのように「地元」を認識しているかを横断的な視点から明らかにすることを試みたものである。特に、過度な大都市集中傾向の中で、周辺地域で育つ子どもたちのありようをとらえ、その地域に対する認識を拾い上げていくことは、本質的には周辺地域の存亡に関わる重要なことだと考えている。

一方で、本研究の限界、あるいは今後の課題をいくつか示しておきたい。まず、本研究では小学生・中学生・高校生の連続性が、結果の冒頭で示したとおり、厳密な意味で担保されていない。これは横断研究の限界でもある。そのため、理想的には地元への愛着に関する縦断的研究を行う必要があるだろう。また横断研究を行う上でも、例えば校区や地域をより細かく限定するなどして連続性を担保する手続きを開発することも必要になるかもしれない。

また本研究では、性差を説明変数として強調することを避けた。それは性の多様性が重視される現代において、女性・男性の別による地元への愛着に関

する発達の相違を示すことは、ステレオタイプを再生産するだけの結果になる可能性があるのではないかと危惧したからである。一方で、依然として存在し続ける性に随伴した価値観とどのように向き合っていくかということも今後取り組む必要がある課題である。特に保守的・伝統的価値が強いとされる地域文化・コミュニティの研究においては、この問題に対して特に敏感である必要があるだろう。

さらに、本研究は探索的研究としての色合いが濃く、例えば説明変数における概念が厳密を欠くものであった。心理学の尺度としてもっと精練されたものを変数として用いた上で、本研究で得られた示唆を精緻に検証していく必要があるだろう。

最後に、思春期以降を対象とした研究では、特に自由回答を求めた場合において、無回答などが多くなるといえる。今回のデータでも、多くの空欄があり、また、真偽を明らかにしにくい回答も散見された。この時期における複雑な心のありようを反映した、様々なデータ上の歪曲のなかから、どのように意味のあるデータを抽出するのかについても、今後検討していく必要があるだろう。

謝辞

調査に協力していただきました鳥取県東部の小学校の児童の皆様、中学校・高等学校の生徒の皆様、実施にあたり、実施協力やご助言を賜りました校長先生をはじめとする先生方に厚く感謝申し上げます。

また草稿段階の2017年3月に心理科学研究会中四国地区合同合宿にて発表した際に、様々な意見をいただきました。参加者の皆様にお礼申し上げます。

付記

本研究は2014年度地域学部地域教育学科の「地域調査実習」における「地元志向」研究班(本田理沙・宮本菜摘・仲島叶子・西垣光・大西和紀・菅原孝道・山崎みのり・山本千尋)と米原拓矢氏(大学院地域教育学科;研究時)と共に企画検討・実施した研究調査を改めて分析し、解釈・考察を加えたものである。

文献

- 阿部 真大 (2013). 地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会 朝日新書
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol. 1 Attachment*. New York: Basic Book.
- (ボウルビィ, J. 黒田 実郎・大羽 葵・岡田 洋子・黒田 聖一(訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩

崎学術出版社)

- Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- 石黒 格 (2012). 地域間移動は地元の人間関係を壊すのか 石黒 格・李 永俊・杉浦 裕晃・山口 恵子 「東京」に出る若者たち 一仕事・社会関係・地域間格差 ミネルヴァ書房, pp. 91-118.
- 吉川 徹 (2001). 学歴社会のローカルトラック 地方からの大学進学 世界思想社
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 村本 由紀子・遠藤 由美 (2015). 答志島寝屋慣行の維持と変容 社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー 社会心理学研究, 30, 213-233.
- サトウ タツヤ・安田 裕子・木戸 彩恵・高田 沙織・ヤーン・ヴァルシナー (2006). 複数経路・等至性モデル — 人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究, 5, 255-276.
- Striebe, M., Schut, H., & Nauta, M. (2015). Homesickness: A systematic review of the scientific literature. *Review of General Psychology*. Advance online publication. <http://dx.doi.org/10.1037/gpr0000037> gene

付録 1：小学生用

あなたの育った町についてのアンケート (5年生用)

みなさんこんにちは。

私たちは、みなさんが育ったまちに対してどのように考えているかアンケートを通して調べたいと思っています。

テストではないので、思ったとおりに○をつけてください。

アンケートの結果はこの調査の目的以外には使用しません。

答えたくない質問には答えなくてもかまいません。

ご協力よろしくおねがいします。

1. あなた自身のこと、家庭・生活のことについて教えてください。

1) あなたの性別はどちらですか? 男・女

2) あなたは何才ですか? 才

3) -1 引っ越しをしたことがありますか? ①はい ②いいえ

3) -2 上で「はい」と答えた人に質問です。

引っ越しをする前はどこに住んでいましたか? 県 市町村郡

4) あなたは今どこに住んでいますか? 県 市町村郡

5) そこにどのくらい住んでいますか? 年 か月

6) あなたの住んでいる家はいつからそこにありますか?

①親から ②祖父母から ③祖父母より前から ④わからない

7) -1 今住んでいるまちは好きですか?

①とても好き ②好き ③あまり好きではない ④全く好きではない

7) -2 上で①、②と答えた人に質問です。それはなぜですか? (あてはまるものすべて)

①家族がいるから ②友だちがいるから ③まち自体が好きだから

④その他 ()

8) -1 家の近くに好きな場所がありますか? ①ある ②ない

8) -2 「ある」と答えた人に質問です。理由を教えてください。

例) 近所の公園 ー ー 友だちとよく遊びに行くから。

(ー ー)

(ー ー)

①商店街 ②近くのスーパー ③ショッピングセンター(イオンなど)

④コンビニ ⑤その他()

9) -2 それはなぜですか?理由を教えてください。()

10) -1 あなたは、しゃんしゃん祭りや納涼祭など地域の祭りや行事に参加したことはありますか? (参加とはおどることだけではなく、見ることもふくみます。)

①よく参加する ②時々参加する ③あまり参加しない ④全く参加しない

10) -2 上で①、②と答えた人に質問です。参加したことのある祭りや行事を教えてください。

()

11) 近所の人と立ち止まって話をすることはありますか?

①よくある ②ときどきある ③あまりない ④まったくない

12) 近所に自分の先祖のお墓はありますか?

①ある ②ない ③わからない

13) 家族とよく話をしますか?

①よく話す ②話す ③あまり話さない ④まったく話さない

14) 学校で過ごす中で、好きなことはなんですか?

あてはまるものに○をしてください。(あてはまるものすべて)

①好きな先生がいる ②好きな授業がある
③友だちと過ごすこと ④クラブ活動が楽しい

⑤その他() ⑥この中にあてはまるものはない

15) 学校を卒業しても仲良くしたい友だちはいますか? ①いる ②いない

16) 将来の夢はなんですか? ()

17) 鳥取に住み続けたいと思いますか?

①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

18) 大人になっても鳥取に住んでいると思いますか?

①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④まったくそう思わない

ご協力ありがとうございました。

付録 2：中学生・高校生用

あなたの育ったまちについてのアンケート

みなさん、こんにちは。

私たちは、みなさんが育ったまちに対してどのように考えているかアンケートを通して調査したいと思っています。

テストではないので、思ったとおりに○を付けてください。

アンケートの結果はこの調査の目的以外には使用しません。

答えたくない質問には答えなくてもかまいません。

ご協力よろしくお願いします。

あなた自身のことや家庭、生活について教えてください。

1. 性別：男・女

2. 年齢： 才

3. あなたは引越しをしたことがありますか？

①はい ②いいえ

「はい」の人は3で答えた場所に引っ越してくる前はどこに住んでいたのか教えてください。

県 市町村郡

4. あなたは今どこに住んでいますか？ 県 市町村郡

5. あなたはそこにどのくらい住んでいますか？

年 ヶ月

6. あなたはどの世代から今の場所に住んでいますか？

①親（1代前） ②祖父母（2代前） ③祖父母より前（3代以前） ④分からない

7. あなたが今住んでいるまちは好きですか？

①とても好き ②好き ③あまり好きではない ④全く好きではない

①②に○をした人は理由を以下から選んでください。（複数回答可）

①家族がいるから ②友だちがいるから ③まち自体がすき ④その他

8. あなたは家の近くで好きな場所がありますか？あれば、理由も教えてください。

例) 近所の公園 友だちとよく遊びに行くから

[]

9. どこで買い物をするのが一番好きですか？

①商店街 ②近くのスーパー ③郊外型商業施設（イオンなど）

④コンビニ ⑤その他

それはなぜですか？あれば理由も教えてください。

[]

10. あなたはしゃんしゃん祭りや納涼祭など地域の祭りや行事に参加したことはありますか？（参加とはおどることだけでなく、見ることなども含みます。）

①必ず参加している ②時々参加している

③あまり参加していない ④全く参加していない

①②に○をした人は参加したのある祭りや行事を教えてください。

[]

11. 近所の人と立ち止まって話をすることはありますか？
 ①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
12. 家の近くに先祖のお墓はありますか？
 ①はい ②いいえ ③分からない
13. あなたは家族とよく話をしますか？
 ①よく話す ②話す ③あまり話さない ④全く話さない
14. 学校生活の中で好きなことは何ですか？
 当てはまるものに○をしてください。(複数回答可)
 ①好きな先生がいる ②好きな授業がある
 ③友だちと過ごすこと ④部活が楽しい
 ⑤その他 ()
 ⑥特に当てはまるものはない
15. 学校を卒業しても付き合いたい友だちはいますか？
 ①いる ②いない
16. あなたが将来つきたいと考えている職業は何ですか？教えてください。

[

]

17. あなたは鳥取に住み続けたいと思いますか？
 ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない
18. あなたは将来鳥取に住み続けられると思いますか？
 ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

ご協力ありがとうございました。